慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ノヴァーリスの「黄金時代」：神秘体験と終末論の接点をめぐって
Sub Title	On golden age in Novalis' thoughts : A contactpoint of mysticism with eschatology
Author	中村, 元(Nakamura, Gen)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1981
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.42, (1981. 12) ,p.138- 156
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00420001-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ノヴァーリスの「黄金時代」

——神秘体験と終末論の接点をめぐって——

中村　元

(I)

一七九九年に成立した『キリスト教世界、あるいはヨーロッパ』(Die Christenheit oder Europa) の中で、ノヴァーリスは「黄金時代」(Goldene Zeit) の到来について次のように語っている。「すべてはまだ暗示にすぎず、ばらばらで未熟ではある。だがそれは、歴史の眼には、宇宙的人格、新しい歴史、新しい人類、若い、喜びに打たれた教会と愛の神とのこの上ない甘美な抱擁、そして同時に、教会の千もの身体が孕む新しい救世主の敬虔な懐胎である。甘美な恥じらいとともに喜ばしい希望を感じぬ者がいようか？　新しく生れ出るもの、それは父の似姿であり、昏い無限の眼を持つ新たな黄金時代、即ち、預言者が奇跡を顕わし、傷を癒やし、慰め、永遠の生命に火を点じる時代であるだろう」[1]（傍点は引用者）。

ところで、「黄金時代」という観念は、古代ギリシャにまで遡るものであって、ヘシオドスにより最初の文学的表現が与えられた[2]といわれている。そしてこの観念は、ユダヤ・キリスト教起源の黙示録的な「千年王国」論と並んで、経

験的時空に制約された現実を乗超えるために、ある特定の理想イメージを希われた時間空間の中に移し入れるという作用によって、コートピア思想の際立った典型をなすものである。だがその際忘れてならないのは、そもそもこのような理想イメージを産み出し、これの虚偽なる時空への転移を促すものが、他でもなく、いまここにある現実そのものの堪え難い悲惨なのだということである。(3)

いずれにしても、このような黄金時代、千年王国といったユートピア的観念は、理想イメージに則っていまここにある現実を否定し、端的にその終りを宣告するが故に、これを担う者につねに新しい、革命的な意識を喚起してきたのであって、それは、とりわけヨーロッパ精神史の中で十三世紀の反教権主義運動におけるヨアキム・フォン・フィオーレとこれに連なるフランシスコ心霊団、さらには十六世紀のドイツ農民戦争におけるトマス・ミュンツアーと再洗礼派…といったキリスト教の異端的な諸潮流に見てとられる通りである。

本来、理想を描き出し、理想をイメージのうちで実現することは、いうまでもなく想像力の働きによるものである。従って、これらのユートピア的観念は想像力からその本質的な糧を得ているのであって、それ故に神秘家や詩人のヴィジョンに極めて深い関わりを有し、その文学的造型に大いに寄与してきたのである。(4) ノヴァーリスはこれから見ていくように、ヨーロッパ精神史におけるこのようなユートピア思想の系譜の中で自らの文学的造型を実現していったのであり、その稀有な内的体験の内容を黄金時代というユートピア的観念に則って物語ったのである。従って、黄金時代という観念はノヴァーリスにおいてこそ、文学上の十分な具体性と体験そのものに基く比類ない真正さを獲得したのであった。

ノヴァーリスの思考と感情にかくも固有な「どこにでもあってどこにもないかの祖国の夢」(5)が、ブロッホの言葉を借

りれば「人間が誰しも子供時代にみとめながら、未だ誰もいったことのない故郷」[6]への憧れが「黄金時代」という言葉によって総括できるとするなら、黄金時代のイデーは『キリスト教世界、あるいはヨーロッパ』のみならず、実にノヴァーリスの全作品にわたって多かれ少かれ感じ取られるのであって、また事実、そうであればこそ黄金時代のイデーを理解することは、ノヴァーリスの全作品の解釈にとって決定的な鍵を提供することになるのである。

ところで、ノヴァーリスにあっては、ルカーチの指摘[7]を待つまでもなく、その生と作品は、あるいは体験とイデーは他に類例を見ないほど緊密に結びついている。従って、ノヴァーリスを総括的に論じようとする場合、彼の生と作品、体験とイデーはどのように関連しあっているのかということが是非とも問われねばならなかったし、事実また、このことは、多くのノヴァーリス論者が彼を、いわゆる「ゾフィー体験」(Sophien-Erlebnis) による詩人として言及することによって、これ迄繰返し大なり小なり問われてきたのであった。だから、ノヴァーリスの黄金時代のイデーを論じるに際しても、このことを無視する訳にはいかない。つまり、ここでは黄金時代のイデーと彼固有の体験との関連が問われねばならないのである。そして、後述するように、もしノヴァーリスの生涯の、亡きゾフィーをめぐる一連の瞑想と幻視の体験が「神秘体験」(mystische Erfahrung) と呼びうるなら、さらに彼の黄金時代のイデーが「終末論」(Eschatologie) と見做されるなら、彼の生と作品の、体験とイデーの関連を探ることは、ここでは神秘体験と終末論の接点を明らかにすることに他ならないのであって、これこそ本論文の意図するところなのである。

(II)

ノヴァーリスに黄金時代の到来を心から確信させるに至った体験はどのようなものであったろうか？　このことは、

従来ノヴァーリス研究家の間で論議されてやまなかったあの、「突如として一切のものを造り変え、その後彼の全生活の内容となった感情を彼のうちに呼起した」[8]事件が、黄金時代のイデーの形成に即して見られる時、どのように理解されるべきか、という問題である。

このためには、ゾフィー死後五十六日目（周知のように、彼の『日記』（Tagebücher）には彼女の命日を起点とした日付が記されている。）の一七九七年五月十三日の『日記』に記された体験がどのようなものであったか、を吟味することから始めねばならない。「夕刻ゾフィーのもとへ行った。そこで僕はいわくいい難い喜びを感じた―仄めくような恍惚の瞬間―僕は眼の前から墓を塵のように吹き飛ばした―幾世紀がまるで数瞬間のようだった―彼女の接近が感じられた―僕は彼女がいつ何どきでも現れるだろうと信じた。」[9]ここから読み取れるのは、ノヴァーリスが「恍惚」（Enthusiasmus）の只中で「幾世紀」（Jahrhunderte）を「数瞬間」（Momente）のうちに感じ取ったということである。これは「永遠」（Ewigkeit）を「瞬間」のうちに把えたことを意味するものに他ならないのであって、そうであるが故にまた、彼には生と死の境界が廃棄され、死せる「彼女の接近」（ihre Nähe）が感じられたのである。このことをさらにはっきりと物語るのが、以下の『オフターディンゲン』（Heinrich von Ofterdingen）の言葉である。「より高い世界は私たちが通常考えているよりずっと近くにある。すでに此の世で私たちはより高い世界に生きている。」[10]「より高い世界」（die höhere Welt）、それは、前述の『日記』との関連でいうなら、「永遠」の世界であり、ゾフィーの住む死者の世界、霊界である。従って、ノヴァーリスはここでも、死が生に力を及ぼし、両者が互いに浸透しあっていること、それ故「すでに此の世で」（schon hier）霊界を把えうるのだ、と述べているのである。（尚、ついでにいっておくと、「すでに此の世で」、いまここで、という定言は、アルベール・ベガンも指摘しているように、[11]彼の思惟の本質的な特徴であって、

後で触れるノヴァーリスの黄金時代のイデーの終末論的性格を考慮する際にも、忘れてはならないことである。）いずれにしても、一七九七年五月十三日の体験は、時間と永遠が、生（現世）と死（霊界）が互いに浸透しあい混淆しあっていること、つまり、時間＝永遠であり、生＝死であるという、いうならば世界の根源的絶対的なあり様を彼に開示したのである。

そしてこの体験は、『日記』が証明しているように、[12] ノヴァーリスがゾフィーの死以来絶えず死せる彼女について黙想し、又自らも自殺を「決心」（Entschluß）して、これについてつねに思いをめぐらす、[13] という状況の中で生じたものであった。次の『日記』は彼のこうした状況における心的印象を表現している。「世界はますます疎遠になっていく、周りの事物もますますどうでもよいものになっていく。だが、それにつれて、今や僕の周辺と僕の内部はいよいよ明るくなっていく」[14]（五月二十二日、六十五日）。即ち、彼はこの体験を機縁として（外的）「世界」から遠ざかり、自己の「内部」へと向う。つまり、ここで彼にとり問題であったのは、五月十三日のあの体験によってしっかりと確認されていた永遠の世界（霊界）の存在がどこでどのようにして把えられるかであって、もしそれが存在するにも拘らず外界で感官によって把えられないなら、我々自身の内部で感官以外のものによって把える他はない、と考えられたのである。次のノヴァーリスの言葉はこのような脈絡で理解すべきであろう。「内部へと神秘の道は通じている。永遠とその世界、過去と未来は我々の内部にあるのでなければ、一体どこにあるのだろう？」[15] 以上のような外界からの離脱と内面への降下という心的事象を、いわば象徴的に物語っているのが、『夜の讃歌』（Hymnen an die Nacht）における光の否定と夜の讃美という表象である。「私は身を転じて、聖なる、表現し難い、神秘な夜に向って下りていく（……）。光は何と貧しく、また何と幼く見えることか（……）。夜が我々の心の裡に開く無限の眼は、かの彼方で光輝やく星々にも勝って

聖なるものと思われる」[16]（『第一讃歌』）。このような光、ないし昼の否定は、いうまでもなく時間空間カテゴリーの支配下で光によって可視化される外的世界からの脱出を端的に表明するものであり、又、夜とは内部、すなわち時間を超え、空間を超えているが故に感官によっては把握しえない永遠の世界を意味するものに他ならない。[17]

既に見ておいたように、このような光の否定と夜の讃美に見てとられる外界からの脱出と内部への沈潜は、ノヴァーリスの、死せるゾフィーと自分自身の死（自殺）への思いから生じたものであった。彼はこの時、いうならば自己の内面で外的世界に対して死んだのである。それ故にこそ彼は日記にこう書く、「僕にとって全世界は彼女とともに死滅した。その時以来、僕はもはや此世のものではない」[18]（六月九日、八十三日）。それは、自己の生そのものを放棄するというのではなく、ゾフィーと自分自身の死がいわば究極的な生の意味となるために、霊的な死を遂げることを意味する。従って、ノヴァーリスの外界からの離脱と内面への沈潜は、それが根底にまで、時間＝永遠、生＝死という世界の根源的絶対的リアリティーにまで達する時、内面での霊的な「死」と「再生」（Wiedergeburt）を喚起するのであって、これにより新しい生の次元が獲得されるのである。このことを『夜の讃歌』（第三讃歌）は次のように表現している。「墓丘は塵の雲と化し、その雲を透して私は恋人の光輝やく面影を見た—彼女の眼には永遠が宿り—私がその両手を取ると、涙は光きらめく断ち難い糸となった。幾千年が嵐の遠ざかる如く彼方へ沈み—新しい生命に私は彼女の首に縋って歓びの涙を流した」[19]（傍点は引用者）。ここでは「新しい生命」（das neue Leben）といった表現に留意するまでもなく、霊の、死をくぐり抜けた再生の歓びが真底から告白されている。そして、以上のような内容を有する極限の体験をノヴァーリスに一瞬のうちに明かにした事件こそ、既に触れたかの一七九七年五月十三日のそれに他ならなかったのである。

ノヴァーリスのその日の体験は紛れもない「神秘体験」であった。というのも、神秘体験の本質は、これ迄見てきたように、俗的な生の諸形式を乗超えて、人間と世界の根底に宿る根源的絶対的事実、即ち、時間即永遠、生即死、人間即神、等々の事実（こうした事実の開示を古来、神秘主義者は「神秘的合一」（unio mystica）という言葉で表現してきた。）に触れ、これによって生の根底から主体の変革を、霊の再生を実現するものに他ならないからである。[20]

そして、ノヴァーリスにおいては神秘体験の本質をなす死と再生という要素が、これから見ていくように、黄金時代のイデーを形成するモティーフとなるのである。

ノヴァーリスの、神秘体験による再生が生み出す自己意識の覚醒は、既に一七九一年シラーに宛てた手紙の中で、季節感に托して予告されている。「僕は爽やかな秋の大気の中で生き、活動しています（……）。僕にしてみれば、ゆっくりと死に絶えていく自然の眺めは、殆んど、春の自然の開花と躍動よりも一層豊かで偉大であるように思えるのです。」[21]「秋」（Herbst）が「春」（Frühling）よりも彼に「一層豊かで偉大」（reicher und größer）に見えるのはなぜであろうか？　それはいうまでもなく、秋が死を通り抜けることによって自然の偶然的な要素を取除き、本質的なもののみを後に残す、という働きを有するからである。彼にとって本質的なものとは、死をかいくぐっても尚生き永らえるものであり、死後に再び甦るものである。だから、死とは世の本質的なものと偶然的なものを選り分ける、いわば試験紙とでもいうべきものである。秋が死を想起させるのは、実にこの意味に他ならない。そうであればこそ、ノヴァーリスがゾフィーの死に際して抱いた感情も、やはり「僕の秋が来ている。」[22]というそれであった。ところで、秋が死を想起させる（erinnern）ものであるなら、再生を予感（ahnden）させるのはいうまでもなく、春である。「春、私たちをあれほど感動させるのは、（……）幾多の楽しい日々と、実に様々な自然の、健やかに成長する生命への予感、より高い永遠の開

花と成熟への予感なのである。[23]」こうした「春」の「予感」(Vorgefühl, Ahndung)は、自己の内面の永遠の世界に沈潜し、霊の再生を体験することによって初めて、秋の気分から生じてくるのである。とも角、秋は死を想起させ、春は再生を予感させる。こうしてノヴァーリスの心の中で、二つの季節感をめぐって次の連想図式が出来上る。即ち、秋—死—追憶、春—再生—予感。以上のように考える時、彼が次のように祈った理由が理解できる。「神様、(……)どうかこの切ない追憶を、大胆な憧れを、(……)いつまでも持ち続けさせて下さいますように[24]」(一七九七年六月六日、八〇日)。彼がこう祈るのは、彼の心の中で、即ち、彼の過去の追憶と未来の予感の中でゾフィーが生き続けるためである。彼は過去に彼女と結ばれていたことを追憶し、未来にやがて彼女と再び結ばれることを予感する。従って、ノヴァーリスにとって過去と未来は永遠と同義となるのであって、両者の中間をなす現在だけが否定すべきものとなる(「現在の無化—未来の絶対化」(Annihilation des Jetzigen—Apotheose der Zukunft)[25]。

現在否定ならびに過去と未来の絶対化、他ならぬこの図式のうちにこそ、ようやくノヴァーリス個人の体験事象が外化され、超個人的類的事象へと移しかえられる契機が見てとられるのである。こうした個から類へ、内から外への転換を彼は次のように表現している。「(……)第一歩は内部へ向かう視線—私たちの自我を排除する凝視—だがそこに留まるだけではまだ中途半端である。第二の歩みは外部に向かう能動的な視線—外部世界への自発的で堅固な観察でなければならない。[26]」ここには、古来すべての預言者や神秘家、ヨーガ行者が辿った認識の二段階の階梯が原形のまま、表わされている。彼らにとって常に問題なのは、自己の内部の深みで得られた根源的事実、真理の認識を外部に持ち帰り、人間の共同の実存の場でこれを証しし、実現することであった。というのも、彼らの認識が普遍的真理である限り、それは自己の内と外の両方で確証されねばならなかったからである。ノヴァーリスもここで彼らの範例に倣う。ところで、人

間の共同の実存の場とは歴史に他ならない。従って、ノヴァーリス個人の神秘体験の内容が個を超えた人間の共同存在の場へと転じられる時、それは歴史観という形で結実するのである。このようにして、彼の心情の中の、即ち、死への追憶と再生への予感の中の過去と未来のイメージは、歴史事象と見做されることによって人類史の一定の段階として、即ち、過去の黄金時代と未来の黄金時代として定立されるに至る。

(Ⅲ)

以上、ノヴァーリスの過去と未来の黄金時代というイデーが彼個人の神秘体験から直接導き出されたものであることを見てきた。従って、これから問題とすべきなのは、これら各々の黄金時代のイデーが彼の具体的な歴史考察の中でどのように表われているかということである。このことをノヴァーリスがヨーロッパ史の傾向について論じた『キリスト教世界、あるいはヨーロッパ』の中で確認しておきたい。

論文は次のような書き出しで始まる。「ヨーロッパがキリスト教徒の土地であった時代、この人間的に形造られた大陸に単一のキリスト教が棲んでいた時代、それは美しく輝やかしい時代であった。[27]」ノヴァーリスはここで、まず過去の歴史において「美しく輝かしい時代」(schöne glänzende Zeiten)、即ち、黄金時代が存在したことを告げ知らせる。そして、その根拠を宗教的な契機に、即ち、「単一のキリスト教」(Eine Christenheit)、未だ分裂を経験していない、統一的なキリスト教の存在に求めている。以上のことに加えて、そのすぐ後に続く「大きな政治勢力を領導し、統率していた[28]」「一人の首長[29]」や「首長の下に直接に置かれた[30]」「無数の同業組合[31]」といった教皇と教会組織を指すと思われる表現は、彼の描き出そうとしている過去の黄金時代がヨーロッパ中世にあることを推測させる。宗教それ自体と宗教組

織の統一による平和と同時に、過去の黄金時代としてのヨーロッパ中世の内実をさらに特徴づけているのは、以下のような、キリスト教信仰による霊的平和である。「彼ら（聖職者たち）は大きな見知らぬ海上での経験豊かな舵取りであって、その保護の下で人はどんな嵐も物ともせず、安んじて本来の祖国の岸に確実に到達し、上陸できるという期待を抱くことができた」[32]（括弧内は引用者）。当時、人々は教皇を頂点とする教会組織のうちに、日々の苦悩を忘れて保護と安らぎを見出し、教会の教えるところによって「本来の祖国」（die eigentliche vaterländische Welt）、即ち、永遠の世界への参入を期待することができた、とノヴァーリスは見る。そうであればこそ、彼には教会の行いは「天国を此世の唯一の国とする」[33]試みと見做されたのであった。

以上が過去の黄金時代についてのノヴァーリスの記述の要点である。ところで、ここで最も問題的で、これまで賛否とりまぜて様々に論じられてきたのは、彼の以上のような中世讃美をどう理解するか、であった。それは例えば、ルカーチがいうように「ロマン主義的反動」[34]の世界観を言い表わしたものなのだろうか？　いや、そもそも彼は、あのような中世記述が歴史的事実として受取られることを望んでいたのだろうか？　答は否である。このことは彼の歴史理解から明らかになる。彼の歴史理解において問題なのは、「現実の歴史の反対物でありながらも、予言的且つ共時的にそうあるべき歴史」[35]（傍点は引用者）である。つまり、そうあったという事実ではなく、自己の内的欲求に基いて「そうあるべき」であった事柄である。要するに、彼が歴史記述において企てているのは、「（……）事件の長い系列を見渡す能力を備えて（……）過去と未来の目に見えぬ連鎖を認めて、希望と追憶から歴史を組合せる」[36]ことであって、それは詩的直観による歴史解釈、歴史の神話化とでもいうべきものである。従って、彼が中世を過去の黄金時代として物語るのは、歴史的事実によるのではなく、そうあるべきだった、そうあってほしかった、という過去の歴史に対する彼自身の願望に基いてい

るのである。過去の黄金時代としてのヨーロッパ中世という表現が歴史的事実の裏付けによるものでなく、まして彼の確定した世界観を表示したものでもないこと（何故なら、世界観とはいうまでもなく、どんなものであれ、冷静な事実認識に基くことなしには成立しえないのだから）は、以上のことから明らかであろう。事実、中世の記述それ自体を辿ってみる時、そこにあるのは何か影のような曖昧模湖としたものであって、具体性が意図的に放棄されているという印象は否めない。つまり、中世そのものを示す名前や概念は、そこでは全くといっていい程見当らないのである。

いずれにしても、過去の黄金時代の統一は以下のような形で終りを告げる。「人類は未だこの輝かしい国に相応しく成熟してはおらず、十分に教化されていなかった。最初の愛が商業活動の圧迫のうちに眠り込み、愛の追憶は利己的な日々の気遣いに押しのけられ、その絆は後に欺瞞であり、気狂い沙汰だといいふらされ、後世の経験に基いて批判を受け、大部分のヨーロッパ人によって永遠に引裂かれてしまった。[37]」このようにして「分裂」(Spaltung)[38]と「戦争」(Krieg)[39]の時代が始まる。ノヴァーリスは具体的に、「宗教改革」(Reformation)、「啓蒙主義」(Aufklärung)、「仏革命」(französische Revolution)という三つの分裂的傾向を示す事例を挙げて、自らの生きる時代が否定性の時代、分裂と戦争という事態によって端的に表わされる文明の最底部に位置する時代であることを指摘する。周知のように、ルターはキリスト教の拠り所を唯一、聖書に求めた。しかし、このことは聖書を絶対化する結果となり、そこに記された文字の背後に潜む聖霊の働きを顧慮することなく、文字それ自体をキリスト教の原理としてしまい、従って、知性のみにより聖書を理解するという誤ちを犯した、とノヴァーリスは見る。さらに彼によると、このことによって知性と信仰の分裂は決定的なものとなり、知性の偏重は結局、以下のような啓蒙主義に行きつくことになる。「彼らは自然、大地、人間の霊、諸科学から文学を一掃し、聖なるものの凡ゆる痕跡を根絶やしにし、凡ゆる崇高な事象や人々への追憶に冷

笑を浴びせて貶しめようと、たえず忙しく立ち働いていた。[40]」このような啓蒙主義の知性偏重と無信仰により、不可避的に仏革命が生ずる。そして、革命がもたらしたものは、分裂の極限としての既成物のあらゆる価値喪失であり、その意味で「真の無政府状態[41]」であった。だが、ノヴァーリスはここにこそ真に積極的なもの、即ち、未来の黄金時代に至る契機を見てとろうとする。というのも、こうした分裂の只中であればこそ、世界の再統一への激しい憧れが生じるのであって、分裂はいわば、未来の黄金時代の前提をなすものと考えられるからである。

ところで、過去の黄金時代が崩壊し、今ある分裂と戦争の時代がもたらされたのは、既に確認したように人間が黄金時代の統一に対して無自覚であり、単にこれを無意識に享受していたにすぎなかったからである。従って、未来の黄金時代に至る歩みは、あらゆる点で必然的に意識的たらざるをえない。そして、このような意識的に黄金時代を取戻そうとする試みを司るものこそ、彼にとっては信仰であり、愛であり、又、詩なのであった。これらは黄金時代に到達するための仲介力と見做されており、元来、単一の力、単一の「聖なる感覚」(Heiliges Organ)[42]の名残りの様々な表れと考えられているのである。こうした意識的な歩みによって聖なる感覚が復活し、超感覚的なもの、不可視なるものがこれによって自由に把えうるものとなる時、即ち、「内的人間の万能」(Allfähigkeit der innern Menschheit)[43]が現実のものとなり、人間が全面的に自己を実現する時、黄金時代はもう既にそこにあるものとなる。「いつ、それはいつのことか？　それを尋ねてはならない。今少しの辛抱だ。その時はやって来るだろうし、やって来なければならない、新しいエルサレムが世界の首都となる永久平和の聖なる時は。[44]」ノヴァーリスの黄金時代への期待はここで黙示録的な調子で告げられており、世の終末における御国(「新しいエルサレム」(neue Jerusalem)の実現としての黄金時代の、此世での差迫った到来を感じさせるのである。それは、ベンヤミンがドイツ・ロマン派全体の傾向として「ロマン主義的メシ

アニズム」[45] (romantischer Messianismus) と名付けているものであって、決して彼岸の天国に解消されるものではなく、「此世の神による支配」(Regierung Gottes auf Erden)[46] といった表現とともに、ノヴァーリスの、人類全体の此世の終末における究極的決定的な救済という問題意識を、端的に物語るものである。この意味で、彼の黄金時代のイデーは全く終末論的な刻印を有しているのである。なるほど、そこでは例えば、伝統的な終末論に固有な「最後の審判」(der jüngste Tag) という観念を見つけ出すことは困難である。それは、本来ならば世の終末に際して、いわば上からの超自然的神的な力によって此世に忽然と現出するものである。ノヴァーリスの終末論がこうした見方を取らないのは、彼がこのような力を超越的なものではなく、内在的なもの、元来人間の内部にもう既に存在している力と見做し、従って、最後の審判を、人間自身によって主体的に、詩的宗教的行為を通しての人間の自己実現によって達成しうるものと理解しているからである。「人間は誰しも最後の審判を道義性によって呼び起すことができる。我々のうちで千年王国はたえず持続しているのである。」[47] という彼の発言は、この意味でいわれたものであろう。だから彼にとっては、H・W・クーンも指摘しているように「終末は外部から世界に現れるのでなく、つねに既に現にある、そしてまた他方では、未だない現実なのである」[48] (傍点は引用者)。このように彼が終末を人間の内在的事象としているのは、彼の神秘体験の、いわば自力的性格、即ち、それが死せる恋人ゾフィーをコンセントレーションの対象として瞑想修行を行った結果によるものであること、と対応しているように思われる。

『キリスト教世界、あるいはヨーロッパ』で見られた黄金時代の様相は、以上の通りである。ノヴァーリスはここで、過去と未来の黄金時代、そしてその中間に位置する、いわば黄金時代の欠如態としての現在、という三段階の歴史図式を示している。このような歴史観が啓蒙主義に発する近代のそれと全く相対立することは明らかである。というの

も、啓蒙主義者にとっては歴史は絶え間ない上向きの発展と考えられるのであって、過去は現在から見ると、現在が既に克服した未発達の段階として軽視されるのだから。とも角、黄金時代のイデーにおいて歴史とは過去と未来の二つの黄金時代に挟まれた期間（現在）を意味するのであって、なるほど、喪われた且ての統一と調和の再臨を目指して進んでいくものとされる。しかし、未来に実現されるこの黄金時代は且てのそれともはや同じものではない。それは、いうまでもなく歴史のプロセスを経たものであり、人間の意識を介したものだからであって、過去の黄金時代の無意識の調和、それ故にこそまた喪われるという必然性を有した調和とは、性格を全く異にするのである。従って、ノヴァーリスにおいては未来の黄金時代は過去の黄金時代への単なる回帰ではなくて、より高い段階での再現と見做される。「未来の世界では、一切は昔の世界のようである。だが全く異ってもいる。未来の世界は理性的なカオスである。」[49] 彼は未来の黄金時代を、多様なものや個性の豊かさを解消することなく、これを「理性」によって統一する時代として把握する。従って、歴史の歩みは彼にあっては、過去の黄金時代の単調さから発して、現在の分裂と不調和を経由し、未来の黄金時代の自由な、教化された多様性の中での統一と調和に至る、と考えられる。

以上のような黄金時代のイデーに見られるノヴァーリスの歴史観が、聖書の、楽園―堕落―永遠の御国という歴史観に基いていることは明らかである。それ故にこそ、それはキリスト教終末論の救済史観の類型と見做しうるのであって、彼がこの伝統的な見方をどのように発展させているのか、ということに他ならぬ彼の存在意義がある訳であり、又そこに彼の神秘体験の独自な性格と彼を取巻く時代の特殊性を感じ取ることができるのである。

（Ⅳ）

これ迄見てきたのは、ノヴァーリスの「黄金時代」のイデーが彼自身の「神秘体験」から直接由来したものであること、そして、それは世の終末における人間全体の究極的な救いという問題意識に貫かれている点で、端的に「終末論」と名付けうることであった。とすれば、黄金時代のイデーを介して神秘体験と終末論との間には何か本質的で不可分の関係があると断定せざるをえない。既に見たように、神秘体験の本質とは、日常レベルでは常に隠されている時間＝永遠、生＝死といった根源的絶対的事実の認識による「死」と「再生」の体験、即ち、これ迄の自己の古い生存様式に対して霊的に死に、生れ変って新しい生の様式、新しい生の次元を獲得するという事態に他ならなかった。事実、古代ギリシャのエレウシス以来の密儀の伝統において、また新約のパウロ以降の回心の伝統において常に演じられてきたのは、このような霊の死と再生という人間の極限の内的ドラマだったのである。ちなみに、パウロはイエス、キリストという不可分・不可同・不可逆の根源的事実に触れた時の体験を次のように言表わしている。「古いものは過ぎ去った。見よ、すべてが新しくなったのである」（II・コリント・5・17）。

ところで「終末論」とは、元来究極の事物についての教説であって、世界ならびに人類の究極的運命に関わるものである。そして、キリスト教終末論においては周知のように、大雑把にいって、宇宙的破局とこの後に続くメシアの到来による永遠の神の御国の出現、宇宙の更新が世の終末の中心的な内容をなしている。つまり、それは類的宇宙的規模の死と再生の事象なのであって、『ヨハネ黙示録』に次のように記されている通りである。「私はまた、新しい天と地を見た。先の天と地は消え去り（……）。また御座から大きな声が叫ぶのを聞いた。（……）『もはや死もなく、悲しみも、叫びも、痛みもない。先のものが、すでに過去ったからである。（……）見よ、私はすべてのものを新たにする』」（21・1～4）。

従って、「神秘体験」と「終末論」はともに「死」と「再生」をその本質的内容としているのであって、「神秘体験」

はこれを個人の実存に関わる事象として、他方で「終末論」は人類と宇宙全体の運命に関わる事象として物語るのである。それ故神秘体験が人間の共同性の地平で把えられる時、それは終末論となる他はなく、同様に、終末論の実現は各々の個体の中で神秘体験として表象される他はない。この意味で終末論とは神秘体験の比喩に他ならない。

以上のことから、ノヴァーリスが一七九七年六月十六日―二九日（九〇―一〇三日）の『日記』の最後に記した言葉「キリストとゾフィー」（Xstus und *Sophie*）[50] の意味が理解できるのである。両者がともに仲介者を意味していることはいうまでもない。しかし、ゾフィーは彼個人のための仲介者であり、キリストは全人類のための仲介者である。ところで、仲介者の役割が自らの死を通して世界の根底に宿る根源的事実を証しし、このことによって我々を霊的に甦えらせることにあるなら、ゾフィーとは、ノヴァーリス自身の個人的事象における再生、即ち、「神秘体験」のシンボルとなるのであり、他方、キリストとは、類的事象における再生、即ち、「終末論」のシンボルとなっていることが理解される。

神秘体験とは、現在において終末を先駆的に生きることに他ならず、現在を真に生きるためにこれを終末として、かけがえのない歴史の究極の一瞬として生き抜くことに他ならない。従って、終末論が突きつけるものとは、現在における本来的な生き方、即ち、自分が今ここでどう生きるべきかということに対する決断なのである。未来の黄金時代が世の終末に出現するものである以上、なるほどそれは文字通り未来に属している。しかし、そうでありながら、それは同時にまた現在を規定する力も有している。つまり、それは、未来の黄金時代の到来というノヴァーリスの提起に対して我々が今ここでどう答えるか、どのようにそれを実現するか、という問いを突きつけているが故に、極めて現在的な事柄となる。また、それは我々の現在をそういう形で規定するのであればこそ、真に未来的事象たりうるのである。それ

は、「神の御国は近ずいた。悔い改めて福音を信ぜよ。」(マルコ・1・15)という言葉に代表されるイエスの終末論的福音宣教が、「神の御国」を全く将来のこととしながら、それに対する決断を現時点で強いることによってこれを優れて現在的な意義を有する事象として提示しているのと、全く同様であって、このような現在と未来の相互関係のうちにこそ、終末論の本質的な構造が明らかとなるのである。ルドルフ・ブルトマンはイエスの終末論的告知のうちに、神の支配、即ち、真の自己に対する二者択一の決断という実存的契機を見てとりつつ、新約聖書の「非神話化」(Entmythologisierung)を通して、終末論が個の実存を覚醒するものとして存在意義を有することを立証した。[51] とすれば、ノヴァーリスが終末論としての黄金時代のイデーを提起した真の理由も、恐らくはこうした実存の覚醒を促すこと、即ち、時間＝永遠、生＝死、人間＝神(イエス＝キリスト)という世界の根源的絶対的事実への目ざめによって古い自己の生に対して霊的に死に、甦って新しい生の次元を獲得するという極限の実存体験(神秘体験)を、今ここで我々に促すことにあったのであり、黄金時代のイデーとは、そのための表現形式に他ならなかったのである。

(注)

(1) Novalis: Schriften. Hrsg. von Paul Kluckhohn und Richard Samuel. Bd. 3 S. 519 (以下 N. S. と略記)

(2) 広川洋一著『ヘシオドス研究序説』(未来社、一九七五年)、第一章四五ページ以下を参照のこと。

(3) E・M・シオランは現実の貧困と架空のユートピアとの弁証法についてこう語っている。「貧苦こそがユートピストの偉大な補助者なのであって、ユートピストはこれを(…)養分としてさまざまな思想を育み、また、これを彼自身の妄執の摂理ともするのである。貧苦がなくなれば、ユートピストは休職せざるをえない。(…彼は)もう一つの世界という強迫観念なしには、現在の荒廃に耐えるべくもない(…)。」(『歴史とユートピア』出口裕弘訳、紀伊国屋書店、一九六七年 一一七、八ページ)

(4) リヒャルト・ファーバーは、一九六八年パリの「五月革命」における、想像力それ自体のもつ革命的な力を訴えた学生た

ちのスローガン、「想像力が権力を取る」(L'imagination prend le pouvoir.) に着眼しつつ、このスローガンの先駆をノヴァーリスのうちに見て取っている。(Richard Faber: Novalis. Die Phantasie an die Macht. Stuttgart 1970 S. 12)

(5) N. S. Bd. 2 S. 564

(6) Ernst Bloch: Das Prinzip Hoffnung. Frankfurt a. M. 1959. S. 1628

(7) 「ノヴァーリスの生と作品は—どうにもしようがないことだが、このきまり文句以外には適切な表現がないのだ—切離しがたく一体をなしていて、このような統一体として、彼の生と作品はロマン主義全体の一つの象徴であった。」(『ルカーチ著作集(1)』川村・丸子訳　白水社　一九六九年、一〇二ページ)

(8) Wilhelm Dilthey: Das Erlebnis und die Dichtung. Göttingen 1970 S. 192

(9) N. S. Bd. 4 S. 35f.　(10) N. S. Bd. 1 S. 289

(11) 「この世で今から、ここで今、これこそノヴァーリスのロマン主義の中心となる言葉であり、本質的な定言である。」(『アルベール・ベガン著作集、第一巻、ロマン的魂と夢』小浜・後藤訳　国文社　一九七二年、三二六ページ)

(12) 例えば、彼の一七九七年四月二十三日(三十六日)の『日記』、「しばしばゾフィーと決心のことを考えた」、同年四月二十四日(三十七日)「決心はほんとうにしっかりしていた」等々。(N. S. Bd. 4 S. 30)

(13) 彼の、死せるゾフィーと自身の死への思いは、全くヨーガの瞑想修行 (sādhana) を想起させる。つまり、それは感覚を外界から引離し (pratyāhāra)、心を一点に集中する (dhāraṇā) ことによって、瞑想 (dhyāna) を可能にするのである。事実、五月十三日の彼のエクスタシス体験 (samādhi) は、このような事情によってこそ説明できる。高橋敏氏は、ゾフィー体験が「コンセントレーションの行」であって、しかも女性をメディテーションの対象とすることにおいて「東洋的なオカルティズムのアンチテーゼ」となるものであり、それ故に「ヨーロッパが提出した非常に大きな行の型」であることを指摘している。(『牧神』八号、「夜と光の自然学」牧神社、昭和五十三年、三一ページ)

(14) N. S. Bd. 4 S. 39　(15) N. S. Bd. 2 S. 418

(16) N. S. Bd. 1 S. 130, 132

(17) ルドルフ・シュタイナーは、ノヴァーリスにおける夜の意義は、魂が「無意識」即ち、「より高い現実」である「霊界」

に潜り込むことにある、と指摘している。(Rudolf Steiner: Das Weihnachtsmysterium. Novalis, der Seher und Christuskünder. Dornach. 1964. S. 13)

(18) N. S. Bd. 4 S. 45　(19) N. S. Bd. 1 S. 135

(20) 久野昭著『死と再生』(南窓社、昭和四六年) 一八五ページ以下を参照のこと。

(21) N. S. Bd. 4 S. 98　(22) N. S. Bd. 4 S. 220

(23) N. S. Bd. 3 S. 650　(24) N. S. Bd. 4 S. 44

(25) N. S. Bd. 4 S. 274　(26) N. S. Bd. 2 S. 422

(27) (28) (29) (30) (31) (32) N. S. Bd. 3 S. 507

(33) N. S. Bd. 3 S. 508

(34) G・ルカーチ『ドイツ文学小史』道家、小場瀬訳 (岩波書店、一九五一年) 六九ページ。

(35) N. S. Bd. 3 S. 685　(36) N. S. Bd. 1 S. 257 f.

(37) (38) (39) N. S. Bd. 3 S. 509

(40) N. S. Bd. 3 S. 516　(41) N. S. Bd. 3 S. 517

(42) N. S. Bd. 3 S. 520　(43) N. S. Bd. 3 S. 519

(44) N. S. Bd. 3 S. 524

(45) Walter Benjamin: Der Begriff der Kunstkritik in der deutschen Romantik. Frankfurt a. M. 1973 S. 8

(46) N. S. Bd. 3 S. 523　(47) N. S. Bd. 3 S. 62

(48) Hans Wolfgang Kuhn: Der Apokalyptiker und die Politik. Studien zur Staatsphilosophie des Novalis. Freiburg i. B. 1961 S. 90

(49) N. S. Bd. 3 S. 281　(50) N. S. Bd. 4 S. 48

(51) ルドルフ・ブルトマン『歴史と終末論』中川秀恭訳 (岩波書店、一九五九年) 五七ページ以下。『イエス』川端・八木訳 (未来社、一九六三年) 一三三ページ以下を参照のこと。